

## 事業完了報告書

### 調査研究期間等

調査研究期間	令和7年7月7日 ～ 令和8年3月15日
調査研究事項	<p>I. 教育課程、教育環境整備に関すること</p> <p>研究テーマ</p> <p>② 不登校経験者向けの支援の在り方</p> <p>③ 中学校教育を実施するに必要な、日本語を母語としない方向けの日本語指導の在り方</p>
調査研究のねらい	<p>② 不登校経験者向けの支援の在り方</p> <p>年齢時に不登校を経験し、義務教育を十分に受けることができなかった生徒は、不登校経験に起因した自尊感情の高まりにくさが課題となる傾向がある。そこで、次の(1)～(3)を通して、表現活動によって生徒の自尊感情を高める、効果的な支援の在り方を研究する。</p> <p>(1) 普段の学校生活における、安心して自己表現できる環境づくり</p> <p>(2) 校内外の諸行事における、体験活動や表現活動等の充実</p> <p>(3) 学習の成果を発表する機会の充実</p> <p>③ 中学校教育を実施するに必要な、日本語を母語としない方向けの日本語指導の在り方</p> <p>日本語を母語としない生徒は、日本語社会におけるコミュニケーションの取りにくさが、自尊感情の高まりにくさにつながる傾向がある。そのため、日本語指導と生徒の自尊感情を高めることは表裏一体である。それ故に、日本語指導を「国語の授業」の枠内だけにとどまるものとして捉えるのではなく、前述「②不登校経験者向けの支援の在り方」の(1)～(3)に掲げた、「表現」に関わるすべての場面で行いうるものとして捉え、日本語力と自尊感情を同時に高めていく効果的な指導の在り方を研究する。</p> <p>また、入学希望者面談、学期末懇談、進路懇談、健康診断等における通訳者による生徒支援や、年度初めのオリエンテーション、進路学習における翻訳書面の活用によって、母語による確実な意思疎通、生徒理解に努めるとともに、生徒の不安を軽減し、生徒が安心して学校生活を送ることができる教育環境づくりについて研究する。</p>
調査研究の成果	<p>【②不登校経験者向けの支援の在り方・③日本語を母語としない方向けの日本語指導の在り方の両方に共通して関わる内容】</p> <p>(1) 普段の学校生活における、安心して自己表現できる環境づくりについて</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業においては、協働的に学ぶ活動を多く取り入れ、生徒同士が意見交換や共同作業を行う機会を積極的に設けた。また、生徒が他者との関わりを通して自己肯定感を高めるきっかけを得られるような授業展開や授業改</li> </ul>

善という共通の視点を全ての教員がもって取り組んだ。

- ・ 日常の学校生活においても、生徒同士の交流の機会を意図的に設けた。具体的には、補食給食や清掃の時間など、1日に1回は全生徒が集まる時間を設定した。こうした活動を通して生徒同士のコミュニケーションの機会を増やしたことで、行事や授業での発表の場面で自己表現を行う生徒が徐々に増えた。
- ・ 教員間では、毎日の授業前後に生徒の状況や変化についてきめ細かな情報共有を行った。さらに、月2回の定例ケース会議において生徒のアセスメントを実施し、支援方針や対応について協議を重ねた。その結果、長期欠席傾向にあった生徒が登校を再開するなど、学校生活への復帰につながる事例が複数あった。

## (2) 校内外の諸行事における、体験活動や表現活動の充実について

- ・ 近畿の夜間中学校の連合三大行事である新入生歓迎集会・連合運動会・連合作品展にて、生徒たちは他校の生徒との交流を楽しみ、普段の学校生活では見られないほど解放的な様子がうかがえた。このことから、連合行事への参加は、生徒にとって充実した体験活動となったことや、生徒の自己肯定感向上につながったことが確認できた。以下、生徒のふり返りの一部を紹介する。

### 【ふり返り】

「参加校の発表を見て、四中夜間より国際的な学校が多くあることを知ることができた。国を超えて学んでいる姿がかっこ良かった。」

「新入生歓迎集会の多くの人前で初めて発表をした。めちゃくちゃ緊張したけど、何とかやり切ることができうれしかった。」

「連合運動会では、四中が担当校だったため、色々な競技のお手伝いをすることになった。みんなの笑顔を見ていると、しんどさが吹っ飛んだ。」

「連合作品展では、他校の作品を見てすごいなと思った。負けてられへんと頑張る気持ちになった。」

- ・ 校外学習や学習旅行では、校内の学習だけでは経験できない活動や体験を通して、自己肯定感を高めることにつながった。以下、生徒のふり返りの一部を紹介する。

### 【ふり返り】

「日頃あまり話したことのない人と話してみたら共通の話題で盛り上がることもできた。うれしくなった。」

「みんなと一緒に移動することで、普段の授業では見ることができない雰

困気を味わえた。」

「大きな橋を2つ渡って、はじめて徳島に行った。美術館では、絵の大きさに驚き、絵に見とれていた。」

「大鳴門橋の記念館へ行った。人が造った橋の偉大さに驚いた。」

- ・ 本夜間学級創設50周年の節目にあたり、記念モニュメント「ラブストーン」を制作した。生徒が日替わりで石を磨く取組を行ったことにより、生徒同士のコミュニケーションの場が生まれ、日常の中で自然に交流する機会が増えた。また、この活動を通して、生徒が自らの思いや考えを表現する姿もより見られるようになった。さらに、モニュメント制作に関わることで、学級全体で一つのモニュメントを作り上げる経験を通して、生徒の自己有用感の向上につながった。

### (3) 学習の成果を発表する機会の充実

- ・ 今年度実施した作品展、学習発表会は以下のとおり。
  - 7/3-10 校外作品展（庄内コラボセンター）
  - 7/31-8/25 校外作品展（豊中市立蛍池図書館）
  - 9/1-9/30 校外作品展（豊中市立高川図書館）
  - 10/31-11/20 校外作品展（豊中市立東豊中図書館）
  - 11/22 50周年記念の集い&総合学習発表会（学校行事）
  - 11/27-12/23 校外作品展（豊中市立岡町図書館）
  - 1/28-29 校内作品展（学校行事）
  - 2/8 連合作品展（岸和田市立文化会館）
  - 2/19-3/17 校外作品展（とよなか国際交流センター）
  - 3/4-10 校外作品展（豊中市役所第2庁舎ロビー）
  - 3/23-4月末 校外作品展（豊中市立服部図書館）
- ※校外作品展・・・生徒の作品を地域の施設等で展示
- ・ 校外作品展では、「さまざまな国や年齢の方が学んでいる様子が一目で分かり良かった。」といった感想が寄せられるなど、近年の夜間中学校の状況について初めて知ったという声や、夜間学級のことをさらに知りたいという声が多く見られた。「中学校を卒業したけれども、夜間学級に入れるのか。高校に入学したい。学び直したい。」という声もあり、潜在的な入学希望者の掘り起こしにつながった。このことから、校外作品展が夜間学級の取組を広く市民に伝える広報・情報発信の役割を担っていることを改めて確認することができた。
- ・ また、市民に向けて生徒の作品を公開したことで多くの肯定的な感想が寄

せられ、それらを生徒に伝えることにより、生徒の自己肯定感の向上にもつながった。以下、寄せられた感想の一部を紹介する。

**【感想】**

「世界にも夜間学校があれば良いと思う」

「みなさんの作品、想いのこもった言葉に私の心が温くなりました」

「外国の方達が日本語を学びながら、日本人と交流、国際交流の場になっていることがとても嬉しいです」

「えんぴつポスターの「学ぶことは生きること」「もじは命」等ひとりひとりの想いが伝わりました。」

- ・ 校内作品展は2日間実施し、92名の来場があった。併設する豊中市立第四中学校の学齢生徒（約80名）や教職員も見学し、作品を通して夜間学級の学びについて知る機会となった。昼間の中学校の生徒や教職員にとって、夜間学級でどのような学習が行われているのかを知る機会は多くないため、学習成果を一度に見ることができる校内作品展は、夜間学級の教育活動への理解を深めるうえで有意義な取組であった。

また、会場には来場者が感想を一言メッセージとしてカードに記入し掲示するコーナーを設けた。生徒の作品を肯定する多くのメッセージが寄せられ、それらを生徒に伝えることで、生徒の自己肯定感の向上につながるとともに、次の作品制作への意欲を高めることにもつながった。以下、寄せられた感想の一部を紹介する。

**【感想】**

「自分より絵や字がとってもきれいで素晴らしい作品を見せてもらってとってもすごかったです。」

「えんぴつポスターがすごく心に残りました。勉強に楽しんで挑むことはとてもすてきなことなんだと改めて感じるきっかけになりました。」

」

「色々な背景がある中、すごく頑張って取り組んでいることが伝わってきました。」

「とても素敵な作品できた！自分たちも頑張ろうと思えました。これからも一緒に頑張りましょう。」

- ・ 「50周年記念の集い」には、地域の方々や夜間学級の卒業生など多くの方々の参加があった。集いの中で実施した総合学習発表会では、生徒がこれまでの学習の成果を発表し、来場者から温かい拍手や言葉を受けた。こうした経験は、生徒の自己肯定感を高めることに大きくつながった。以下、生徒の

ふり返りの一部を紹介する。

【ふり返り】

「最後の歌が終わり、みんなでお礼のあいさつをする。スーッと気持ちが落ち着いた。みんなが1つにまとまっている感じがした。来てもらったみなさんを見ると、とても良い笑顔だった。」

「お祝いで来ていただいた方々と生徒のみんなが入り混じって、作品を見て回り笑顔で話をしている姿を見ていた。私は気合いを入れて、マイクに近づいた。最後にみんなで写真を撮る時に、ちょっとはしゃいでいる私が出た。この中で一期一会の人もいるのかなあ。余韻を味わいつつ帰路に着いた。」

- ・ 毎年、年度末に発行している文集『まなびや』は、生徒にとって文字による表現活動の集大成となるものである。執筆や編集に取り組む過程で、生徒一人一人の努力が形として結実し、自らの学びを振り返る機会となるとともに、生徒の自信を高めることにもつながった。

また、完成した文集を関係団体等へ送付することにより、夜間学級の教育活動を広く伝えることができ、広報・情報発信の取組としても大いに役立った。

<今年度の送付先>

近畿夜間中学校連絡協議会加盟校	21校
豊中市立小中義務教育学校	56校
豊中市教育委員会関係部局	20箇所
豊中市立図書館	8箇所
豊中市立公民館	5箇所
豊中市立人権平和センター	2箇所
公益財団法人とよなか国際交流協会	1箇所
大阪府教育庁による学校訪問時の配布	20冊

【③日本語を母語としない方向けの日本語指導の在り方に関わる内容】

(1) 翻訳文書を活用した日本語指導の在り方の研究について

- ・ 「健康診断時に使用する問診票」を多言語に翻訳した。これまで外国人生徒向けの多言語版がなく、翻訳ツール等を用いて対応してきたが、医学的な用語が含まれるため、内容が正確に伝わらない場合があった。問診票は生徒の健康管理に関わる重要な資料であることから、できるだけ正確な内容を伝える必要があると考え、専門的な翻訳を依頼し、多言語版の作成を行った。

この取組により、生徒が内容を正しく理解した上で問診票を記入することが可能となり、安心して健康診断を受けることにつながった。また、健康診断時の問診票の翻訳を活用して日本語指導をした。生徒が病院を受診した際などに求められる問診票への対応にもつながった。

(2) 通訳者派遣による安心して学校生活を送ることができる環境づくり

- ・ 今年度の通訳者派遣支援は、42回、実施した。

内訳

入学希望者面談	17件
総合健康診断、各科健診	13件
学期末懇談	12件

入学希望者面談は、1回につき、通訳者1人に対して生徒2名程度で実施してきたが、今年度は昨年度を上回る人数となった。また、今年度は対応が必要な言語が新たに2言語増加した。入学に至らなかった希望者も含めると、対応する言語の広がりを実感する結果となった。

(3) アンケート実施による効果検証

- ・ 通訳者派遣支援実施後に生徒を対象としてアンケートを実施した。「通訳者派遣が助けになったか」という質問に対して、「大変助けられた」が81%、「だいたい助けられた」が19%という結果であり、全ての生徒が肯定的に回答した。このことから、通訳者派遣は生徒にとって非常に有効な支援であることが分かる。通訳者がいることで、生徒は安心した様子を見せ、通訳者を介することで日頃は十分に表現できない思いや状況を伝えることができるようになり、学習意欲の継続にもつながっていると考えられる。
- ・ また、日本語指導支援員による授業支援についても、「授業を理解することができた」と回答した生徒が100%であり、授業理解の促進に大きく寄与していることが確認できた。